

はじめに

本書は、精神科以外の医療現場でうつ病のプライマリ・ケアを行う可能性のある医療者や、初期研修医のような初学者、あるいは精神科後期研修医の方々を念頭に企画されたものですが、世の中に、幾多の「うつ病」を冠した学習書が出版されている中、その構成や内容をどのようにまとめていくかというところで、編著者（河西）と共著者の加藤先生、そして編集者の秋本さんとでさまざまな工夫を重ねながら本書が上梓されました。

本書にはいくつもの特色があります。まず、編著者と共著者による病院やクリニックでの診療や社会のさまざまな領域での精神保健活動における豊富な経験を反映させるべく項目立てを行いました。そして平易なことばを使ってうつ病の見立てや治療の実際を解説しました。最近では、専門外からうつ病のケアに関与する人が増えたことや電子情報の氾濫などにより、うつ病に対する理解や認識に関して、世の中で大きなずれが生じていたり、診療の現場に混乱が生じていたりもしますが、そのような問題についても、率直に問題の本質や解決のヒントを読者に伝えるように努めました。また、最大の特徴は、たくさんの事例を提示したことです。事例の採用に際しては決して奇を衒うことなく、日常的によく出会うような事例を、「しかし少し掘り下げて考察してみれば…」という視点で選び、解説しました。うつ病や、関連する精神疾患の病態や治療に関しては、世界で日々さまざまな臨床研究が実施され、新しい知見が提示される状況にあります。本書では、なるべくエビデンスのあるものやガイドラインとして示されている内容を紹介するように心がけましたが、一部、要検討とされている内容やいわゆる経験論も書いていますし、かなり編著者と共著者特有の見解も含まれているかもしれません。しかし細部はともかくも、本書で最も大事にしてい

るところは、診療に際しての医療者の心構えや態度、そして患者さんとのコミュニケーションのとり方です。患者さんと医療者との治療関係の基盤となるのは、コミュニケーションと信頼関係です。本書は、そこに関わる技術論に多くのページを割いている点がまた大きな特徴と言えます。

本書の内容のうち、「第1章～第3章（「第2章4．薬物治療」を除く）」は主に編著者が執筆し、「第2章4．薬物治療」と「第4章」は主に共著者の加藤先生が執筆しました。また、第4章の「アルコールとうつ病」の事例については、横浜市立大学医学部精神医学教室の井上佳祐先生の協力を得ました。共著者の加藤先生は、編著者にとって、長く精神科の診療や学生・研修医教育、そして自殺予防対策のための地域活動や研究活動をともにしてきた仲間です。加藤先生は、リエゾン精神医学や緩和医療、精神科リハビリテーションの経験も豊富で、今は精神科クリニックを開業し地域医療に貢献しています。本書の執筆開始直後に、編著者が思いもよらず横浜市立大学から札幌医科大学に転勤をすることとなり、出版スケジュールに遅れが生じましたが、加藤先生の強力な支援と、編集の秋本さんの弛まざるサポートにより、無事、本書を上梓することができました。あとは、私どもが大事に書き進めてきた本書が、手に取る皆様のお役に立つことを願うばかりです。

最後に、編著者の職業人としての在り方に少なからず影響を及ぼし、本書上梓の直前に亡くなったあの世の父にここで感謝を捧げたいと思います。

2016年3月

河西千秋